

或る
クロワッサン
の一生



keito

「思わず笑顔になっちゃう当店自慢の一品。百戦錬磨のクロワッサン！」

確かに笑ってしまいそうな、大げさなキャッチコピー。それが僕たちの宣伝文句だった。たったいま命を与えられた僕は、自分がその誇り高い一員であると信じきっていた。

オープンからブザーの低い音が鳴る。待ちに待った焼き上がりのサイン。誕生の初声。シェフが天板から熱々の僕たちを摘み出し、乱雑にトレイへ並べていく。そんなに乱暴に扱ったら自慢のぱりとした生地がボロボロに崩れてしまうと僕は慌てた。案の定、いくつかのクロワッサンの艶々とした皮の表面が無残に割れた。シェフは並べられた僕たちをじっくりと眺めていた。どうやら焼き色が気に入らないようだ。僕たちは少しばかり黒ずんでいた。失敗作なのだろうか。さっきより大きな恐怖に僕は身が震えた。

しかしシェフは何もせずは無言でオープンへと踵を返していった。僕は安堵する。僕たちはトレイのまま棚で冷まされて、今度は紙を敷いたバスケットの中に無造作に積みあげられた。ここでもやはり丁寧に扱われることなく僕はすっかり参ってしまいそうだった。そのまま店内の一番目だたない場所に陳列される。僕たちに立てかけられた値札には「見切り品につき一個百円」という赤文字だけが記されていた。

それから僕たちは誰からも相手にされることなく、そこに佇んでいた。見てくれだけで淘汰される残酷な世界。お昼をとうに過ぎて他のパンたちの大半が片づいたとき、食パンを買いに来た老婆がよくやく僕たちに目をやった。黒目がちの深い空洞のような目で、どこまでも吸いこまれていきそうな気がした。「これもいただくかしら」とカウンターにいる店員に老婆は言った。おいつつですか、と店員が尋ねる。みつつと老婆が親指と人差し指、中指の三本の指で答えた。店員によってトングで無造作に袋にまとめられた。運命は唐突に決まり、そして後戻りできない。このときのひとつひとつの出来事を僕はいつまでも憶えている。こうして僕は目の前にいる老婆に買われていったのだった。

腰の悪い老婆に連れられてたどり着いたのは古い民家で、僕たちは袋のまま食卓に置き去りにされた。古いたくさんのものに囲まれた、なぜだか物寂しい感じのする家だった。老婆はずっとひとりでテレビを見たり、うたた寝をしていた。夕方になって、僕ではないクロワッサンがひとつ、老婆の手によって袋から取り出された。おやつだろうか。年季の入った一パンより煮物が似合いそうな一唐草模様の小皿に乗せられる。今までの乱暴な行為ですっかりボロボロになってしまったクロワッサン。老婆はそのクロワッサンを箸を使って食べ始めた。その顔にはなんの表情も窺い知れず、なんの言葉も発しなかった。ただ黙々と箸を動かし、小皿に入ったクロワッサンはぼろぼろと破片をばらまきながら老婆の口の中へと消えていった。あまりに淡々としたあっけない終わり。次は僕だろうか。僕と残ったもうひとつのクロワッサンは透明なビニール

の中でその夜を過ごした。

翌日、台所の窓に陽が差し込んですぐに老婆は起き出した。朝食となるのかと思われたが、老婆はしばらくテレビを見て何をするわけでもなくのんびりとしていた。しばらくして、小さな女の子が老婆の家へとやってきた。首にはピンクのカードをぶら下げて、カードには可愛らしいお花のスタンプが誇らしげに咲き乱れている。老婆との会話によるとラジオ体操の帰りであるらしかった。じゃあ朝ご飯たべんね、と老婆は少女に語りかける。袋から僕ともうひとつのクロワッサンを取り出すと、老婆は昨日は使わなかった古いトースターに、僕たちを形が崩れないよう丁寧に入れた。少女はトースターの前で、赤く照らされた僕たちが焼き上がるのを、好奇心に満ちたまなざしで見ている。

トースターからチンと高い音が鳴る。老婆が香ばしい匂いをまとった僕たちを取り出して、白い綺麗なお皿に盛ると、同じように真っ白な牛乳と一緒に、少女の前に差し出した。少女は手づかみで僕を掴み、小さな口を目一杯広げて頬張った。僕からはぱりっと心地良い音がした。少女は目を大きく見開き、それから老婆に向かって美味しいと笑顔を見せた。昨日食べたけどおいしかけんね、と老婆もくしゃくしゃの笑みを浮かべた。僕は思い出す。生まれてからの瞬間を。僕は振り返る。恐ろしく残酷な世の中を。

「思わず笑顔になっちゃう当店自慢の一品。百戦錬磨のクロワッサン！」

思わず笑ってしまうが、それが僕たちのキャッチコピー。

たったいま命を失っていく僕は、自分が間違いなくその一員だったのだと悟っていた。

あとがき

練習の一環である『クロワッサン-箸-百戦錬磨』という三題噺から連想された物語。

.....少しでも楽しんで頂けましたでしょうか？

コメントに感想など頂けると幸いです。

タイトルこそ名作のパクリですが、何のオマージュもありません。

ごめんなさい。

すべての物に気持ちがあって、それに気付くことができれば、人はもっと優しくなれますかね、とか。

どんなに辛くても、最後には良いことがありますかね、とか。

そんな気持ちで書いてみました。

「人」以外のモチーフで文章を書くことはほとんどないので、実は公開するのに少し葛藤がありました。

見直してみると題目の使い方にもひねりがなく、己の力量不足を痛感します。

でも、あるがまま、いまの自分のできる範囲で、少しずつ作品を公開していきたいと考えています。

最後まで目を通して頂いた、すべての方に感謝をいたします。

2011/10/11 第一版

恵賭